



## 飛行機に乗ったドン・キホーテの世界漫遊

あゝ 禿げた頭でも値引きなしか？！  
「東京のドン・キホーテ」の名前の由来  
「早稲田は地球の上であり！」——中島商学部長の檄  
12年間の海外生活で35カ国を訪れる  
“エッ 日本は地球の裏側” だって？  
「赤道」クイズ・・・地球をまたぐ  
「五つの『あ』の原則」  
「日本に行ったら日本人だらけだった！」  
世界で語られている日本人のジョーク  
国際化とは？真の国際人とは？  
寝ている間に仕事が進む「魔法のマクラ」  
日野原重明氏から学ぶ  
ライフワークの世界文学紀行  
定年後を輝いて生きるために



プロフィール 清水 武

1966年第一商学部卒。現在66歳。卒業後、国立にあるNHK学園高校の教諭として勤務後、聖教新聞社に入社、同紙特派員としてパナマに10年間駐在、この間に北南米およびヨーロッパの32カ国を訪問する。

2001年に定年退職後、横田基地内のセントラル・テキサス・カレッジに学び、02年にはスペインのマラガ大学に1年間留学。

現在は、シルバー人材センターで駅前の自転車管理の仕事ほか、理事・広報部会長として会報「いずみ」の編集にあたっている。また海外留学アドバイザーとして留学生の相談指導や、NPO法人立川多文化共生センターで、在日外国人支援のボランティア活動にも参加している。

一方、世界文学紀行「名作の舞台を訪ねて」を定年後のライフワークとして、各国を訪れ新聞・雑誌に寄稿している。日本ペンクラブ会員 つつじが丘在住。

ホームページ <http://homepage2.nifty.com/donky/>



## 飛行機に乗ったドン・キホーテの世界漫遊

ただいまご紹介いただきました清水武でございます。昨晚、パナマからニューヨーク経由で帰国したばかりで、時差で少々の睡魔に襲われております。まずは自分の、そして場合によっては、皆さんの中のどなたかの眠気を覚ます話から……。

あゝ 禿げた頭でも値引きなしか？！

先日、こんなことがありました。私は年金生活に入ってから、現役時代と違ってできるだけ儉約生活を心がけるようにしています。散髪代もその一つです。床屋さんに行くのをやめ、けっこう手先の器用な家内がハサミを操り、私の頭を刈っています。これで、それまで毎月4000円かかっていたものがただになりました。

現役時代と違い、社内で身なりを整えることに気を使ったり、若い女性に気に入られようとする気遣いが少なくなったからです。本当はそれじゃいけないんでしょうがね。

「年を取るほどにおしゃれを」というのは女性ばかりでなく男性にも適用されるものですが、私の場合、なんてったってその髪自体があまりないので、頭のおしゃれの仕様がなない。

とはいっても、大事な行事に参加するときや、大切な人と会わなければならないようなときには、やっぱり床屋さんに行くんですね。

でも、この頭です。＜頭を下げて指でさす＞ 他のお客さんよりも髪の毛のある部分がぐっと少ない。そこで散髪が終わり料金を払う段になって、店主に言ってみたんですね。

＜落語の話し方で＞

「マスター、ほらご覧のように、私の頭はほかの人の髪の毛の量の半分ですよ。禿げている部分はまったく手をかけなくてもよいし。だから料金も少しは割り引いてくれませんかねえ」

と、その主人、なんて言ったと思いますか？

「旦那さん、そんな無理をおっしゃらないでくださいよ。確かに旦那さんの髪の毛は少ない。ですから、私としては一本たりとも抜いたり傷めたりしてはいけないと思って、大変な気を遣ってハサミを動かしているわけですよ。逆にこちらが割増料金をいただきたいくらいですよ」

敵もさるもの、上手をいくもんですねえ。

私の頭を見てあの中高年のアイドル、綾小路きみまろさんだったらこう言うでしょう。

中学時代はイガクリ頭。高校時代は髪もふさふさの美少年でした。

あれから50年――。

昔は目の前が明るかった。今、明るいのはこの頭だけ……。

ともあれ、頭が輝いていること即、人生が輝いていることには通じませんが、でも、頭の輝きのように、定年後の人生も輝かせていきたい、というのが今日の私の話の影のテーマであります。

さて表のテーマは世界の文化・生き方比較。タイトルはレジюмеにも書かれております通り「飛行機に乗ったドン・キホーテの世界漫遊」。実は私のホームページのタイトルも「ドン・キホーテの広場」となっております。

### 「東京のドン・キホーテ」の由来

なぜ私がドン・キホーテなのか。

それは今から半世紀以上も前のことになります。小学校6年のときの学芸会で「ドン・キホーテ」の劇をすることになり、私がドン・キホーテの家来サンチョ・パンサを演じたのです。以来、その奇想天外の物語に魅せられて少年版の本を、大人になってからは翻訳物の全巻を、またスペイン語がわかるようになると、今度は専門の先生について原書の一部にも取り組んだのです。さらに松本幸四郎がドン・キホーテを演ずるミュージカル「ラ・マンチャの男」の舞台を3回も見に出かけたものでした。

正義を求め、強きをくじき弱きを助け「見果てぬ夢」を追いかけていく——そのドン・キホーテの生き方に魅せられて、私も定年になると自らを「東京のドン・キホーテ」として勝手に名乗り、世界文学紀行「名作の舞台を訪ねて」なんて“見果てぬ夢”に向かって各国を旅している次第です。

物語の中のドン・キホーテは槍を掲げ、愛馬ロシナンテに乗っていますが、作品ができてから400年たった現在の東京のドン・キホーテは、パソコンとカメラをひっさげ、飛行機に乗っての世界漫遊となった次第です。

ところで、きょうのこの会場「市民交流センター」は、私にとっては何か親しみを感じる場になってきました。それはたまたま、昨年と今年、この建物の1階の集会室で通訳と講演みたいなことをしたからです。

昨年は2月に国際交流の集いがこの1回の集会室であり、そのとき予定していた通訳の人が来られなくなり、急きょ私がここにいらっしゃる北川市長またロータリークラブ会長ほか登壇者全員の通訳をうけおったような経過があったのです。

今年は、つい2ヵ月前のことですが、やはり国際交流の集いで初めて英語落語を口演、夢に向かって突進するドン・キホーテの冒険の一部を披露した次第です。

### 「早稲田は地球の上にあり！」——中島商学部長の檄

前置きはこのくらいにして、さっそく本題に入っていきたいと思います。

早稲田在学中の商学部の学部長は中島正信先生でした。あいにく先生の講義もゼミも取る機会はなかったのですが、その大言壮語は学内に響き渡っていました。「早稲田は地球の上にあり！」——そんな呼びかけが私の心のどこかに刻み付けられていたようで、結果的に私も地球の上を駆け回るような人生になったのだと思っています。

### 12年間の海外生活で32カ国を訪れる

通算しますと海外にいた期間は12年間ほど、特派員として訪れた国は32カ国になります。地域的にはヨーロッパの一部と主にはラテンアメリカつまり中南米でした。そこで

ようは、この中南米で見たり体現した面白いエピソードの一端をご紹介しますと思います。

#### その1

I T時代に入り、海外から日本に原稿を送る手段にも大変な変化が起こっています。今は、日常生活でも、文字を相手方に送るのにはF A Xやメールが当たり前になっていますが、約 30 年前、私がパナマに赴任した当時は、F A Xさえもまだありませんでした。体験談のように急がない原稿は航空便で、ニュース性の急ぎの原稿は、電話で送ったものでした。

書いた原稿を電話口で読み上げます。それを、本社の担当記者が、原稿が短ければそのまま書き留め、長ければテープに録音し、それを再生するわけです。そのとき、まず電話口での最初のあいさつにとまどったものでした。時差の問題です。

例えば、ブラジルで、すべての取材が終わって原稿をまとめ送るのは夜の 10 時頃。ところが日本では朝の 10 時です。(ブラジルは日本とちょうど 12 時間遅れの時差があります)。

こちらはホテルのあまり明るくないライトのもとで「コンバンワ」。でも相手から戻ってくるあいさつは「オハヨウゴザイマス」。しかも、こちらは一日の仕事の疲れでブランデーなど寝酒の時間なのですが、相手は朝の空気を胸いっぱい吸いながら、モーニングコーヒーで一番張り切っているときなんですね。

#### “エッ 日本は地球の裏側” だって？

そう、ブラジルといえば、こんなエピソードもありました。国はちょうど日本の真反対にあります。これをある時、ブラジル人と話をしている「日本の真裏のブラジル」と言ってしまう、ずいぶん反撥されたことがありました。

「何言ってんだい。ブラジルから見れば日本こそ裏側じゃないか！」と。たしかにその通りですね。円い地球から見れば、どちらが表でどちらが裏かは決められないわけです。

ちなみに、南米で見る世界地図は日本のものとはかなり違っています。ちょっと小学校時代に習った世界地図を思い出してみてください。地図の図法によっても違いますが、もっとも一般的なメルカトル図法では、日本が地図のほぼ真ん中にあり、その左側にアジア、ヨーロッパのユーラシア大陸、アフリカ大陸、右側に太平洋をはさんで北米大陸、南米大陸が描かれています。ブラジルなどは右下の端の方にある。

ところが、あちらの地図では、真ん中に北南米大陸が描かれています。ですから、日本の位置はというと、ずっと左上の端、日本の地図でいうイベリア半島、つまりスペインの端、世界の外れのような位置になるのです。彼らの言うことも分かるような気がしますよね。

#### その2

#### 「赤道」クイズ・・・地球をまたぐ

ここでクイズをしてみましょう。これは中学校の総合学習での講演の際に生徒によ

く聞いてみる質問です。早稲田の大先輩の皆様にこんなことを聞くと失礼に当たるかもしれないが・・・

地球儀または世界地図に描かれている「赤道」の正しい定義は次のどれでしょうか？

- ①「地球上に引かれている赤い線」
- ②「地球上の最も暑い点のつながり」
- ③「地球の横腹を一周し北半球と南半球に二分する線」
- ④「地心を通して自転軸に垂直な平面が地表に交わる大円」

<各々を解説> 3番、4番は一応、正しいといえるでしょう。でも2番は異論が出てきて、さらに1番ともなると論外ですよ。

エクアドルに行った時、私はその「赤道標」といわれるものを訪れました。首都キト市の郊外へ車で小1時間。荒涼とした禿山のふもとのやや広い台地に、基台の各辺が約8m、高さ15mほどの、先端に向かってやや細くなっていく四角柱が立っていました。その上に直径3mほどの地球儀がのっかっています。

四角柱の各面には、それぞれ[E][O][S][N]との文字が刻まれています。それぞれスペイン語で「東」「西」「南」「北」の頭文字なんですね。

[E]（東）[O]（西）面にあたるコンクリートの地面の真ん中には、幅10cmほどの1本の線が東西に伸びていました。これこそまさに「地球を南北に二分する」という“赤道”なのです。

でも冗談ながら、色は何もついていませんでした。赤色でもなく、地面の汚れと土ばかりでそれは黒色に近くなっていました。私は先に友人から聞いていた指示を思い出し、その線を両足でまたぐと、持っていたカメラを同行の友人に渡し、ポーズをとったんです。友人は破顔一笑。「セニョール・シミズ！とうとう地球をまたぎましたネ」——と。この瞬間、私は地球の南北両半球に足をかけたことになるのだというんです。

たいそうなユーモアですが、言われてみるとついそんな気になってしまうから面白いですねえ。これも冗談ながら、またいだ両足も股も、熱さでヤケドをするようなことはありませんでした。

周囲の気温は暑さとは程遠く、摂氏10度前後で肌寒いほど。キトが海拔2800mの高地にあるからです。ところで、国名の「エクアドル」とは、実はスペイン語で「赤道」の意なんですね。

<レジュメの真ん中の写真です。右肩の写真はドン・キホーテの著者セルバンテスの生家の前で撮ったものです。右下の写真は、カリブ海の島に住むパナマの原住民クナ族の写真です>

さて、この赤道の下半分、いや南半分の南半球では四季も反対になります。日本は今、紅葉から枯葉の季節。南米のブラジルやアルゼンチンでは、新緑が萌える季節を迎えようとしているところですね。

その3

## 「五つの『あ』の原則」

ところで、これだけ交通や通信の手段が発達しても、それぞれの国の人々の生き方や生活慣習はそんなに変わるものではありません。

新幹線が10分か15分おきに正確にピタリと発着する。都内の通勤電車も2～3分おきに入ってくる。少しでも遅れると皆イライラし出すという日本です。

それに比べ、私のいたパナマではそうした問題はありませんでした。それは電車がなかったからです。近場は自動車かバスで、遠くへは飛行機が一般的でした。

そんな分、秒を争う時間正確な日本の競争社会から、何事においてもゆったりしたりリズムのラテン・アメリカ（中南米）に赴任したばかり、ずいぶんイライラしたものでした。

向こうは何事も「アスタマニャーナ」でよいのです。これはスペイン語で「あしたまた」という意味ですが、5時または6時になると、仕事が途中でも、店にお客さんがいても「アスタマニャーナ」で帰ってしまう。仕事の約束の期限が守られなくても「アスタマニャーナ」。それよりも自分の生活を大切にしているんですね。

パナマでも、夜遅くまでオフィスに電気のついているのは、大部分が日系の駐在企業でした。もっとも、先ほど申し上げた時差の関係、ということもあり得ます。パナマと日本の時差は14時間。東京本社が昼間の時間に、上司と連絡を取るためには、向こうは夜の時間に電話をしなければならないわけです。

ところがパナマ人は、社員のみならず役員も、官庁の局長クラスの幹部職員も、定時には殆ど帰ってしまっているのです。

私も、「これこれしかじかの取材をいつまでに」との指示を日本から受け、一生懸命取り組むのですが、なにせ相手のあることです。はかどらない交渉と仕事にとうとう「五つの『あ』の原則」を編み上げました。

「あせらず」「あわてず」「あくせくせず」「あてにせず」そして「決してあきらめず」――。

この「五つの『あ』の原則」を心にとどめている限り、それほどイライラすることもなくなってきたわけです。海外ではまさに“郷に入ったら郷に従え”が大事なんですね。

### その4

「日本に行ったら日本人だらけだった！」

もう一つの大きな特徴は人種の混交です。

昨日まで訪れていたニューヨークは“人種の坩堝（るつぼ）”と言われていますが、パナマシティも同じです。ある時、日本での研修会に参加したパナマ人が帰国するなり言ってきました。

「S r シミズ (M r シミズ)、日本での研修会は素晴らしかった。大勢の仲間にも会うことができたし、あの新幹線にも乗ることができた。日本人は本当に親切で感激しました。充実した日本滞在だった。でも、とても驚いたことが一つあったんですよ。それは、

日本に行ったら日本人だらけですネ」と。

先住民のインディオと、新大陸の発見以来、ヨーロッパからやってきた白人、それに運河の建設時に労働者として入った黒人や中国人。その子孫。そしてその混血。またその混血……。極端な言い方をすれば、100人集まれば、100人の肌の色が違うパナマからすれば、彼の発言もうなずけるような気がします。

もっとも、日本も近年は、いろんな国の人々が東京にもまた地方にも住むようになり、状況はかなり変わりつつありますが……。

その5

### 世界で語られている日本人のジョーク

こうして海に囲まれた、世界の中でも特異な存在である日本と日本人についてこんな小咄も流布しています。ここでまた質問です。

「ある日、大洋を航海していた船が事故で沈没してしまいました。海に放り出された乗客は、遠くに見える島に向かって泳ぎだしました。その中のたった3人だけ、この小さな島に泳ぎ着くことができたのです。若い男2人と女1人でした。さて、この男2人は女1人をめぐってどんな行動をとったのでしょうか？」

答えは次の通りです。

フランス人：1人は彼女の夫に、もう1人は彼女の愛人になりました。

イギリス人：なんと2人は、彼女を放っておいて、自分たち2人で愛し合い始めたのです。

イタリア人：2人は彼女を自分が手に入れようと、決闘を始めたのです。

では日本人はどうしたのでしょうか？

日本人：2人は、島のどこかに電話がないかとあわてて探しに出かけました。本社に電話して、上司の指示を仰ごうとしたのです。

——この小咄、日本人の行動形態の特徴をよく表わしていると思いますよね。

もう一つ、同じようなよく知られたタイタニックのジョークがあります。多分、この会場にも知っていらっしゃる方もいると思いますが……。

<ジェスチャー大きく>

「いよいよ沈没しかけた船から、男も女も我先にと救命ボートへ避難しようとした。大混乱になろうとしている現場で、婦女子を優先させようとして船長が説得を試みま

す」

まずアメリカ人男性に：「キミはヒーローになりたくないか！」(解説)

イギリス人男性に：「あなたは真性のジェントルマンだ！」(〃)

ドイツ人男性には：「君の国の法律ではそうなっているよ」(〃)

そして日本人男性には：「皆がそうするからあなたもそうした方がいいと思いますよ」

このように、日本人は、まず周りに合わせようとするんですね。周囲の目を気にし、突出することを恐れ、横並びを好み、他人のするように自分もする、という傾向を持っている。日本人は、他人の目を気にしすぎるように思いますね。

私の好きなドン・キホーテの言葉にこういうのがあります。

「理想と正義に向かって突進するオレのことを、皆はおかしいと言う。でも、やりたいことがあるのに、世間の風評、体面なんかを気にして現実に妥協、やろうとしない彼らこそおかしいんじゃないのかね」

この言葉の後半部分は、日本人のメンタリティー、傾向性をも表わしていると思いますね。

### 国際化とは？真の国際人とは？

こうした時代に入って大事なことは“心の国際化”だと思うんですね。海外経験が多いからといって必ずしも国際人につながるわけではない。外国語ができるからといって、これも必ずしも国際人というわけでもありません。

国際人の要件とは、私の考えるところでは：

1. 自国の文化に深い理解と愛情をもち、必要に応じてそれを外国人にも伝えることが出来ること。
  2. 他国の文化を理解し、現地の習慣や伝統を尊重、よい面は積極的に学んでいこうとする姿勢を持つこと
  3. どの国、どの民族とも友好理解を心がける姿勢があること
- といった点に集約されるような気がします。

このことに関連し、先の創立 125 周年記念の際に、素晴らしい話を聞きました。それは白井総長が、5 年以内をめどに 8 千人の外国人留学生を受け入れるとともに、早稲田からも 8 千人を海外の教育機関に留学生として派遣するという方針を発表したのです。

現在、早稲田には約 2400 人の留学生がおり、約 1000 人が海外に留学しているようです。この計画が実現すれば、全学部生の 1 割程度が外国人になるとの計算だといいます。総長は「外国人と日本人が交流する全人教育をめざしたい」として、現在は全教員の 1 割ていどのとどまっている外国籍の教員も 2 割まで増やすと言っているようです。国際化が進む時代に国際人の育成と、素晴らしい進取の卓見だと私も思います。

### 寝ている間に仕事が進む「魔法のマクラ」

時代は国際化とインターネットの普及で、世界はますますつながりを深めています。ここで最後に、私のパソコン生活での最前線のエピソードの一つを紹介してみます。

ちょうど 2 年前にホームページを立ち上げました。すると、知り合いの外国人の友人から、「自分たちも書かれているものを読みたい」との希望が寄せられてきたのです。そこで、それぞれの言語圏や文化にも共通し、興味深く読まれそうなテーマに絞って自分で翻訳を



始めました。

でも、その翻訳は第三者のチェックが必要です。そしてチェックはネイティブが理想なのです。私も国内に多くの外国人の友人がおりますが、それぞれ忙しくてチェックを頼むのには気が引けます。プロに頼めば相当額のチェック料金を取られるでしょう。

そうこうしているなか、なんと「記事を読みたい」と言った海外の友人自身が翻訳のチェックを申し出てくれたのです。英語はアメリカに住むKさん、スペイン語はパナマに住むMさんでした。Kさんは横田基地で知り合った元米軍将校、Mさんは私がパナマ特派員だった当時の友人で、元獣医。

彼らの申し出に心から感謝しているところですが、これをもう一步広げて考えていくと、なあんだ、アメリカでもパナマでも、そこに住んでいる人はいわば誰でもが、つまり 100パーセント近くがネイティブであるというわけです。

こうして、翻訳した原稿を夜、メールに添付して送っておくと、時差の関係で向こうは昼間、早いときには翌朝には私のパソコンにチェックされた原稿が戻っています。こちらが寝ている間に仕事は進んでいるのです。

「フラット化する世界」(トーマス・フリードマン著)がベストセラーになっています。そこでは、パソコンによる仕事が、インターネットを使いアメリカからインドへ、インドからイギリスへ、そしてまたイギリスからアメリカへと地球の昼時間を追っかけて進んでいる、つまりそれぞれの国の労働者は仕事が終わって眠っていても、リレーされたその作業は 24時間どこかの国で続いていると述べています。

30年前、私が特派員としてパナマに赴任したころは、メールはおろかファクスさえありませんでした。日本語もローマ字で打ちながらのテレックスによる交信でした。すごい時代に入ったものですね！いみじくも友人が言ったものです。

「あんたはいいね。“魔法のマクラ”を持っている。自分がよだれをたらし、いびきをかいながら寝ている間に仕事をやってくれるという魔法のマクラをさ！」

#### 日野原重明氏から学ぶ

さて、世界漫遊のエピソードの羅列をしてまいりましたが、話を締めくくるにあたり、「定年後を輝いて生きる」との陰のテーマにひとこと触れておきたいと思います。ここにいらっしゃる大部分の方が、私を含めシニアまたはシルバーエイジに属しているように思われるからです。私は人生を輝かせていくポイントは、ドン・キホーテのように、いつまでも夢を掲げていること、そして新しいことを始めることを臆しないことだと思っています。

たぶん皆さんもご存知の日野原重明さんは今年 96 歳。今も聖路加国際病院の理事長を務め、活発に書き物や講演活動をしていることはよく知られていますね。私は定年になった年、有楽町の東京フォーラムで行われた「サードエイジ」のフォーラムに出席しました。そのときのメインスピーカーが日野原さんでした。当時は 90 歳。約 1 時間、立ったままで、元気はつらつの講演でした。

そのときのドクター日野原によると、今も 3 階の自分のオフィスまでエレベーターを使

わずに階段を登っているとのこと、それもとどきどき 2 段とびで登る、と言っていました。世界各地での講演にも行っています。その際、空港ではベルト(動く歩道)を使わない。かばん等の荷物を持ったまま通路を歩き、ベルトに乗っている人を追い越していくのが快感なんだ、なんて言っていました。

つい最近でも、新聞紙上のエッセイで、駅のエスカレーターの右側を駆け上り、左側で立ったまま動かない若者たちを追い抜いて、自分が先に上階に達すると、いつも「やったな」と心の中でガッツポーズ。その達成感がますます健康にしてくれる、と語っています。つまり、よく歩け、よく体を動かせ、ということなんですね。

58 歳のときにハイジャックに遭った。死ぬかもわからないような状況に合ったことで 60 歳からの人生の新しいスタートをさせたといいます。「なにか年とともに少年のような冒険心が出てきた。新しく始めることを忘れなければ、いつまでも若い。60 歳からが本当の命、本当の人生だということをお伝えしたい」と言っていました。

そして[新しいことを創(はじ)めるのを放棄したところから老いが始まる]とも言っています。思えば私自身は、経歴も経験も雲泥の差のある人生の大先輩・日野原先生の足下にも及びませんが、それでも定年前後から創めた新しい挑戦が、予想もしなかった世界を切り開いてくれていることを実感しています。

それはホームページのトップページの写真にあるように、ギターと料理です。ギターは定年 3 年ほど前、まったくの初歩から始めたのがきっかけとなり、スペイン留学の際には個人教授を得て、数曲のレパトリーをもてるまでになりました。今は講演の合間などの演奏で、皆さんにリラックスしていただくこともできます(きょうは時間も限られていますので)。米寿を迎えた、遠方に住む義母のところに行き、昔懐かしい曲をつまびいてあげると、涙を流して喜んでくれました。“ああ、始めておいてよかったなあ”としみじみ実感したものでした。

料理は定年になってすぐ、近くの料理学校(昭島クッキング)に 1 年間通いました。おかげで、現役時代にはほとんど包丁さえ握ることのなかった自分が、今は和・中・洋あわせて 100 を超えるレシピが揃っています。そして今も、毎月 1 回「あいぽっく」で行われている「男の料理教室——食楽会」で腕を磨いています。

今は「男厨房に入るべし」の時代です。このことについては、もっとしゃべりたいところですが、時間もですし、テーマから外れ、なかには「俺の生き方は違う!」と反発心を抱く方もいてはいけけないので、これ以上は触れません。

### ライフワークの世界文学紀行

もう一つ、私が新しく始めたことといえば、一昨年、出版 400 周年の「ドン・キホーテ」から始めた世界文学紀行『名作の舞台を訪ねて』です。紀行文は郷里の信濃毎日新聞に掲載され、それはセルバンテスの生まれたスペインの市の新聞にもスペイン語で掲載されました。

昨年は「風と共に去りぬ」の舞台アトランタとニューオーリンズを訪ねました。来年は

出版 100 周年となる「赤毛のアン」の舞台・カナダのプリンス・エドワード島訪問を予定しています。

その後はシェクスピアの作品を。あまりにも多く迷ってしまいましたが、まずは「ロミオとジュリエット」や「ベニスの商人」のイタリア、「ハムレット」の舞台デンマークを。それからゲーテの「ファースト」のドイツ、ユゴーの「レ・ミゼラブル」のフランス、トルストイの「戦争と平和」、ドストエフスキーの「罪と罰」のロシア、「三国志」の中国——これも舞台があまりにも広大なので、とりあえずは高校時代に学んだ漢詩「赤壁の譜」の舞台を。その後「武器よさらば」また「カルメン」の取材で再びスペインへ等々・・・どれも青春時代に胸躍らせた、また大人になって人生を深めさせてくれた作品です。

理想は取材費のすべてを原稿料でカバーできることですが、少なくとも半額をカバーできれば上出来だと思っています。足りない部分は駐輪場管理等の仕事で得たお金を充てていくことにして・・・。

以前に聖教新聞の社主でもあった創価学会の池田名誉会長から聞いたことがありました。「夢と志が人を創る。大きな夢と志は大きな人生を創る」。そんな言葉を胸に、この定年後のライフワーク、なんとか 20 作品は踏破したいと夢を描いているところです。

#### 定年後を輝いて生きるために

そして最後に訴えたいことは「禿げ頭で輝いていこう」ということです。散髪の料金は安くならないけれど、「はげあたま」も決して捨てたもんじゃない。「定年後を輝いて生きる」ためには、この「はげあたま」つまり「はつらつ」と「げんきに」「あかるく」「たのしく」そして「まあるく」生きていくことです。特にこの最後の「まあるく」が大事ですね。人生、甘いも辛いも経験してきました。今さら人間関係でギスギスしてもしようがない。穏やかに「まあるく」行くことです。そして自分が明るく輝いていけば周囲も明るくなっていくでしょう。

「禿げ頭に悪人なし」といった諺もあります。

——昔、宴会の席などで歌ったものです。

<歌う>・・・ドン ドン パンパ ドン パンパ ♪ウチの親父は禿げ頭 隣の親父も禿げ頭 禿げと禿げがけんかして どちらも怪我(毛が)ねえでよかったな・・・

そう、丸い禿げ頭は他人に怪我をさせないし、その反射で社会を明るくするのに貢献(?)しているわけだし・・・と。ご同輩も誇りをもちますます輝いていきましょう。

文化比較から禿げ頭論へと、話しはあっちこちに飛びましたが、皆様が何かをお感じになり、楽しんでいただければこんな嬉しいことはございません。

もうお腹が空いてきたでしょう。二次会の準備もできたようです。それではお後がよろしいようで・・・

ご清聴ありがとうございました。